随　　想

「見たり、聞いたり、探ったり」No.240

通算 No.392

青　木　行　雄

新国立競技場
令和元年（2019年）12月21日（土）
オープン、セレモニーに参加

長年建設の納材にかかわって来た「新国立競技場」の初お披露目に参加出来る事になり、正直に言って年甲斐もなく胸がわくわくして、オープン当日が待ち遠しかった。建設に３年の月日をかけて、11月30日に完成した競技場は木材がかなり使われ、目をみはる程すばらしいものだった。

2019年12月21日（土）オープンセレモニーで開場16時30分、開演18時30分となっている、６万人の入場で大変混雑すると予想し、15時30分に仲間４人で集合、チケットはＥ側だったので、銀座線の外苑前駅にした。

駅前で食事をとり17時00頃会場についた。まだそんなに混雑はしていなかったのでホッとした。

競技場に近づくと照明と木材の軒庇（のきひさし）がかがやき、外国にあるすばらしい世界遺産や宮殿を思わせた。

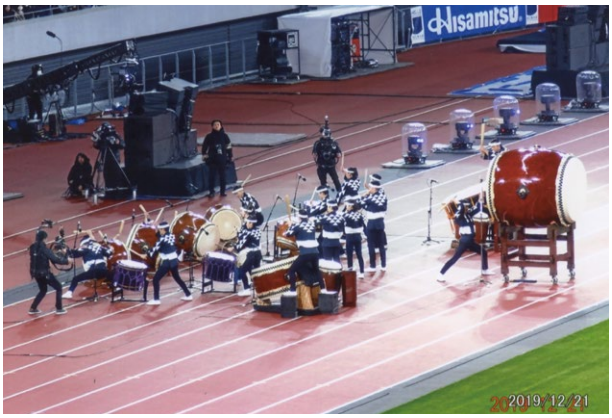
浮び上がるように照明に照らされている木材庇（ひさし）はすばらしい、外周を巡る４層のこの庇のうち下３層の「軒庇」には、多数の細い木材が放射状に配されている、緑豊かな明治神宮外苑の景観との調和を図るため、高さは約47メートルに抑えてあるという。本体、庇（ひさし）部分にも国産材を多く使用したといい、北海道から沖縄まで全47都道府県の木材を北側は北海道から順番に南側は沖縄から、そして北側と東側の入場ゲートには東日本大震災で大きな被害を受けた岩手、宮城、福島県の木材、南側ゲートには熊本地震で被災した熊本県の木材を使っているというのだ。

南側の正面より中から天井に向って写したが、ライトの光で目ばゆい程だ、天井の木材トラスが良く見える、いよいよ開演で一斉に場内にライトがついた。アナウンサーが、開会を宣言、ほぼ満員。6万人程の入場で場内は熱気でいっぱいであった。

18時30分、大鼓芸能集団「鼓童」から始まり、この大空間（だいくうかん）の場内に大鼓の音がなり響いた。イス席から見ると、小さく見える大鼓集団も場内に設置したスピーカーの音響効果で6万人をうならせる程であった。会場の所々に設置してある黒いものがスピーカーである。

大鼓の後は松岡修造の司会により、「東北の絆まつり」が始まった。

秋田市の「竿灯まつり」から始まり、「福島わらじまつり」など東北6県のにぎやかな山車が次々と会場にあらわれ、それはもう大変なにぎわいであった。



青森の「ねぶた」は大きすぎて出入口の壁に引っかかったのか、最後まで出ることも入る事もできず、そのままで終わった。本当は1廻りまわり、その豪華な所を見せたかっただろうに、残念。

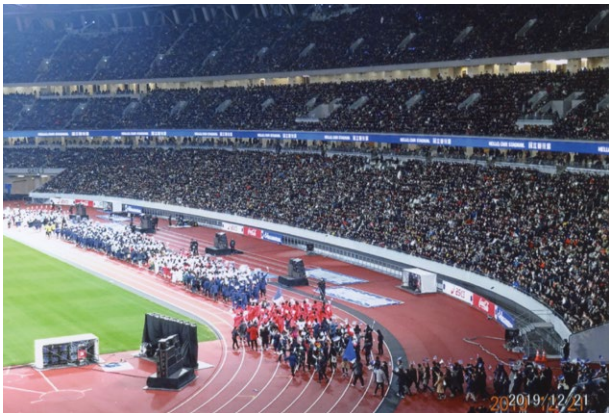
福島のわらじは巨大なわらじで何十人かで担ぎ、上に松岡修造が乗り、にぎわって一廻りまわった。

トラックを1周廻るまつりの一行だが6万人観衆の前で踊りや、ふるまいにさぞかし本人達も感動ではないかと思われる。オリ・パラの開会式券に落選した身ではこの入場と同じだろうとあきらめる。いずれにしても感動の連続であった。

この後、JSC（日本スポーツ振興センター）大東和美理事長の開会宣言があった。

その後会場が暗くなり、スポットライトを浴びた背番号11が登場すると、6万人の観衆から大歓声を浴びる。ボールを右脇に抱えたサッカー元日本代表FW三浦知良＝横浜FC＝はピッチ中央へ歩みを進めた。「大変、興奮しています。自分にとって思い出深いとても大切な場所です。Jリーグ開幕戦、数々の日本代表戦、国内のすべてのタイトルを取ったのもこの場所でした」現役選手として、真新しい芝生に誰よりも先に足を踏み入れる大役を果たす。着用したのは、自身が活躍した1990年代の日本代表ユニホームのデザインをミックスした特注品とか。ドリブルを披露して、サイン入りボールを客席へ蹴り込んだ、1度目がグラウンドに返って来て、2度目に受けたラッキーな観客がいた、もちろんもらえるようである。

その後、広い選手控室の画像が紹介され「早くあそこで着替えたい」とほほえみながら会場を後にした。



その後、ウサイン・ボルトが登場し、インタビューを受け、ケンブリッジ飛鳥や桐生など陸上の記録保持者が多数参加し、走った。

本気で走ることはないだろうが、世界記録保持者が目の前で走るのを見ながら、これがオリンピックに繋がるのかと思いを馳せた次第である。

真暗な会場に浮び出る「三浦知良」

ラグビー日本代表戦士も参加した。

ラグビーW杯日本大会で初めて８強入りした日本代表３人も参加した。スーツ姿で登場したリーチマイケル（FL）主将は「早くこのピッチの上に立って試合がしたい」と熱望した。３層目からもピッチが見やすいとされ、田中史朗（SH）は「これぞワンチームという競技場だ」と称賛した。中村亮土（CTB）は「日本らしいデザインで、すごく素晴らしい」と話していた。

20時過ぎてから、スペシャル・アーティスト・ライブが始まった。

アーティスト第１号は「ドリカム」であった。

これからはいっさい撮影は禁止しますと監視人がついてチェックされた。

生まれ変わったこの国立競技場のオープニングイベントでアーティスト第１号として初登場したのがドリカムである。代表曲の「決戦は金曜日」という曲を歌い上げた。

そして国民的グループの「嵐」が花をそえた。

5人は旧国立競技場時代2008年～13年に、アーティスト最多の6年連続で計15公演を実施したという、音楽パートのトリとして国立初ライブのオープニング曲でもあった「Love so sweet」のメロディにのって登場すると約6万人の観客からこの日一番の大歓声が上がった。この会場は天井に穴のあいたドーム型になっているので、声が一斉に上がると独特の歓声が館内に響き渡るような気がした。

この日のために用意された2台の移動式ステージでトラックを2組に別れて回り、所々でジャニーズらしい華やかな演出で観客を沸かせた。とにかくこの「嵐」の人気にはびっくりして驚くばかりである。

この5人は五輪イヤーの今年いっぱいでグループ活動を休止するそうだが、この国立競技場とともに新たな歴史を刻むことになるのだろうか。

最終に近づいた21時20分頃、この6万人が一度に帰り始めると大変混雑するのではと思ったが観衆はいっこうに帰ろうとしない。そのはずであった。フィナーレには人気デュオ、「ゆず」がサプライズゲストとして登場したのである。2004年アテネ五輪のNHK中継テーマ曲に起用されて以降、“五輪の定番曲”として多くのアスリートの背中を押してきた代表曲「栄光の架橋」を熱唱した。

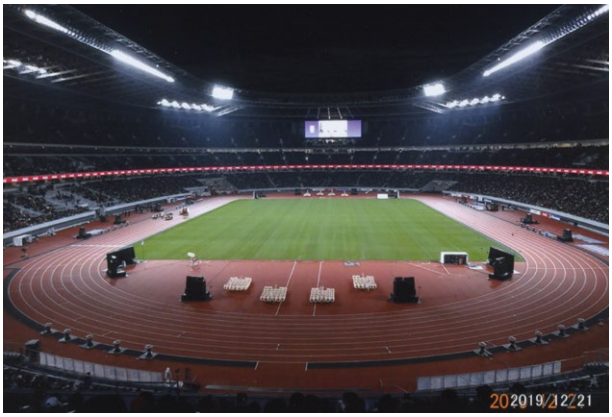
2014年5月に行われた旧国立競技場最後の音楽イベントなどでも同曲を披露するなど、五輪とゆかりが深い2人である。会場の照明が消えて観客6万人の携帯電話のライトが星のようにきらめく競技場のセンターにギターを抱えて立った北川悠仁は「国立競技場の完成、おめでとうございます」と祝福。続けて「完成を祝って、そして2020年東京五輪の大成功を祈って、6万人と歌えたら」と呼びかけ、岩沢厚治と熱のこもったハーモニーを披露、会場が一体となった大合唱でイベントを締めくくったと22日の朝刊に書かれていた。

なんと、この最後のフィナーレに参加しないで私達は混雑をさけて帰ってしまったのである。夏向きの風通しの良いこの競技場は、冬は高齢者にはちょっとこたえたようであった。

真暗な場内に浮び上がる「スマホ」の明かり

外苑前駅がE1側で、こちらの南側から入場した

令和元年11月30日、計画から5年の歳月をかけてついに完成した、「新国立競技場」が、装いも新たに12月21日オープニングセレモニーと共に新しくスタートした。競技場としてのスポーツ会場、新機能として、世界一と思われる芝生やトラックなど最新の設備は、日本の宝として末長く愛され、スポーツ界に又イベント会場として新風を期待したい所である。



参考資料

国立競技場パンフ

日経新聞、朝日新聞、読売新聞、

サンケイスポーツ

令和2年1月12日記

上空より見る国立競技場
〈オリンピックスタジアム〉
出典：https://ja.wikipedia.org/wiki/